

古賀 今日では米大統領選挙でのトランプ勝利の背景を踏まえた上で、欧州で勢いを増しているポピュリスト（大衆迎合主義者）政党との比較を行いながら、現代の政治の潮流について考えることができると思います。まずはなぜトランプが大統領選で勝ったのか。西川先生がこれこそ重要だと考える要因をお聞かせいただけますか。

西川 私が重要だと考えるのは、ヒラリーの得票数が前回、前回のオバマのそれと比べて下がったことですね。それはとりもなおさず、ヒラリーが候補者として強くなかったことを意味していると思います。その一因として考えられるのは、「クリントン」という名前の持っているネガティブなインパクトではなかったかと思えます。夫であるビル・クリントンが大統領在任中に引き起こしたスキャンダル、国務長官時代の電子メールの私用問題とFBIによる捜査など、醜聞が多いというパブリックイメージがクリントンには付いて回った。

それから、ベビーブーマー以下の若い世代に対して求心力を持つ候補者を擁立できなかったことも大きな問題だったと思います。民主党の候補者たちを見ていくと、ヒラ

リー・クリントンはベビーブーマーで、サンダースは70代半ばなのでどちらかと言えば沈黙の世代に属する。バイデン副大統領が出馬していても70代ですからね。民主党は世代の継承がうまくいかなかった。「ミレニアル（1980年代から2000年代初頭までに生まれた層）」と呼ばれている若い世代は、無党派が多くて、民主党でも共和党でもないという価値観を持った人の割合が意外に高いんです。

古賀 事前にはヒラリー勝利を予想する声が圧倒的に多かったですね。しかし、実際の選挙では民主党が獲るだろうと見込まれていた州がひっくり返って共和党が獲った。

西川 ミシガン、ペンシルベニア、ウイスコンシンの3州は民主党の優位が確実視されていたにもかかわらず、結果的に負けている。州ごとに違う敗因があるでしょうが、注目すべきは第三政党が伸びたことです。全体の票数で見ても4・4%ほど獲っていますから、けっこう善戦したと言つてよいでしょう。民主党は第三政党に票を奪われたために、この3つの州で負けたと見ることもできます。

古賀 今回第三政党として出てきた「緑の党」の主張は民主党に近いのだと思いますが、「リバタリアン党」は政策的には共和党に近いという印象がありました。

西川 リバタリアン党は少し複雑なところがあります。リバタリアンにもいろいろいて、経済保守寄りのリバタリ

津田塾大学学芸学部教授

西川 賢

にしかわ まさる：1975年生まれ。慶應義塾大学法学部卒、同大学院法学研究科博士課程修了、博士（法学）。日本国際問題研究所研究、津田塾大学学芸学部国際関係学科准教授などを経て、2016年より現職。専門はアメリカ政治史。著書に「分極化するアメリカとその起源——共和党中道路線の盛衰」「ビル・クリントン」など。



分断される社会と世界のゆくえ

米大統領選挙でのトランプ氏の勝利、欧州各国で台頭する排外主義政党。

ポピュリズムが世界を席卷しようとしている。

このうねりは政治の新しい姿を模索するための創造的破壊となり得るのだろうか？

〈対話〉



中央大学法学部准教授

古賀光生

こが みつお：1978年生まれ。東京大学法学部卒。同大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。博士（法学）。立教大学法学部助教、二松学舎大学国際政治経済学部専任講師を経て、2016年より現職。専門は西欧の極右政党、ポピュリスト政党。共著に「奇妙なナショナリズムの時代」。

アン右派の人々は小さな政府志向です。政府は、経済に対してあまり口出しせずに自由放任をモットーとすべきだと考える。彼らは共和党の経済自由主義にきわめて親和性があります。でも、リパタリアンにもいわゆるソーシヤル・リパタリアンと呼ばれる存在がいます。彼らは同性愛やマリファナ吸引などを全面的に認め、社会的な自由を重視すべきだと考えます。彼らはどちらかと言えばサンタースの考え方により近い。サンタースを支持した若い層には社会的な自由を重視する人が多くて、彼らは本選ではリパタリアン党に流れた可能性がある。ですから、必ずしもリパタリアン＝共和党支持というわけでもない。

古賀 小さな政府志向とは別に、文化的な寛容を重視する層がいるわけですね。ミシガンやウイスコンシン州は、「ラストベルト（錆びた工業地帯）」という紹介のされ方をしていますが、この地域での労働者層の投票先は過去の傾向と比較して今回はどうだったのでしょうか。

西川 最終的な票の集計、データが揃わないとよくわからないところがあります。今回よく指摘されているのが、白人の中間所得層から労働階層までに経済的な大きな不満が溜まっていて、それがトランプに流れたということですね。ニューデール政策以降、この地域では労働組合が大きな存在感がありました。従来は、失業者や労働者の不満を改善する政策を訴える民主党が彼らの支持を吸収してき

ました。しかし、労組も組織的に衰退している面がある。かつて労働者をひきつけてきた大きな政府的なりベラリズムがそういう人たちを吸引する磁力を失ってきていることは間違いない。

古賀 私が研究している欧州を見ても、右翼ポピュリスト政党と呼ばれる勢力が伸びている背景の一つに、左派政党が労働者層をまとめ切れなくなっていることが指摘されています。例えば、フランスの国民戦線やオーストリア自由党などの右翼ポピュリスト政党は、労働者の間で第一党になったことで支持を伸ばしたと指摘されています。ウイスコンシンやミシガンなどの州が伝統的に工業地域であることを考えると、経済的な不満を抱える労働者層を民主党が取りまとめることができずに、彼らがトランプ支持へ回ったと見立てることもできるかもしれませんね。

トランプは本当にポピュリストなのか？

西川 欧州のポピュリスト政党の政策的な主張はどういう感じのですか。必ずしもこれまでの保守に分類されるような主張をしているわけではない印象があります。

古賀 政党ごとにかなり違いがあつて、しかも選挙の中で有権者の動向を見極めて政策を主張している側面がある

ので一概には言えません。あえて言えば、文化的にはやや権威主義に近い、という意味ではアメリカの保守とも近い立場かもしれません。しかし経済政策の面では、社会保障を重視して配分をしっかりとやろうと主張するケースが多い。欧州では、アメリカのような「保守VSリベラル」という対立図式が必ずしも明確ではありません。伝統的には、ヨーロッパの社会民主主義政党も、アメリカのリベラルに相当する立場とは言えません。なぜなら、経済的には再配分を重視しながら、その一方で権威主義的な労働者も引きつけていたためです。しかし、これらの勢力は70年代以降、文化的にリベラルな方向へかなりシフトしていききました。1981年にフランス大統領になったミッテランが死刑制度を廃止するなど、少なくとも90年代ぐらいまでには、多くの社会民主主義政党は社会的な寛容を重視する姿勢に転じました。

右翼ポピュリスト政党が登場した当初は、長く続いたそうした欧州の寛容な社会を是とする風潮に対する対抗勢力として存在感を増していったと見なされていました。

西川 これまでの欧州におけるイデオロギーの軸や垣根がごちゃ混ぜになり始めたよ。

古賀 主要政党が今までの主張を変えてきた中で、それに呼応する形で、選挙で票を獲れそうなところにポピュリスト政党が伸長してきたと言われています。

西川 トランプはポピュリストであると分類されています。彼は事実に基づかない主張や排外的・人種差別的アピールを巧みに利用して支持を調達してきたからです。この点では、大方の共和党員よりもさらに排他的・保守的であるとも考えられます。その一方で、大規模なインフラ投資をするとも言っています。これはケインズ主義的な考え方で、従来は民主党が推進してきた政策ですよ。トランプはさらに大型の減税に踏み切るとも言っています。これなどは共和党の伝統的な主張に他なりません。

トランプという人は、人々から支持され、票に結び付くことだったら、リベラルでも保守でも何でも構わずにハイブリッドな主張として打ち出してくるところがある。彼は極めて民主党的なことも言っているし、極めて共和党的なことも言っています。保守にもリベラルにも分類できないので、だからポピュリストだと見なされてきたわけです。ちなみに、古賀先生は「ポピュリズム」という言葉をどのようにお考えですか。

古賀 これは西川先生に伺いたいと思つていたことですが、果たしてトランプは本当にポピュリストなのでしょうか。欧州のポピュリストたちも移民排斥を訴えるなど排外主義的であることが確かに多い。けれども彼らの主張の核心には、政治的決定は民衆の意思によらなければいけないという根本的な思想があります。そうであるにも関わら

ず、現政権はそれができていないという二段構えになっているわけです。それでは、なぜ民衆の意志が政治的な決定に反映されないのか？ それは「エリートたちが腐敗しているからだ」という言い方をするわけです。

西川 やつらか、我々かと。

古賀 そういう二項対立の図式にもなるし、場合によってはEUのように民衆から乖離した選挙でも選ばれていない——右翼ポピュリストが呼ぶところの——「外の機関があるからだ」という言い方をします。移民排斥に関しても人種差別にならないように、建前上は「国民の資源は国民に配るべきだ」という言い方をします。「我々のものを我々に」が基本であって、「新しく来る人たちが新たな分け前を要求するなら、そうした人たちはノーサンキューだ」という議論を一生懸命構築しています。そのうえで、「民衆の意思こそが政治的決定の基盤である」というのが欧州のポピュリストの主張です。トランプにも同じような主張があるのでしょいか？

ポピュリズムは悪なのか？

西川 彼も同じようなことは言っているとは思いませんね。彼自身は民衆や大衆という言い方こそあまりしません

西川 民主主義について考えていくと、民衆の意思が政治的決定の基盤であるという主張は、ある意味当たり前前なんですよ。言論の自由や労働運動などへの参加も合法的に認められているのであれば、大衆運動に参加して意思表示をすること自体は別に問題ではない。

古賀 欧州の右翼ポピュリストも、自分たちが「ポピュリズム」と呼ばれることをむしろ積極的に歓迎しています。「我々はあなた方の言う意味のポピュリストだ。なぜならば、我々は民衆の声を聞くからだ」という言い方をしています。ですから、ポピュリズムそのものが悪いという議論にはなっていない。ただし難しいのは、右翼ポピュリストは民衆の利益が一枚岩なものとして存在するような言い方をしていることです。敵と味方という二項対立の図式を示した時に、我々の側には一枚岩の利益があつて、それを少しでも分割しようとする者は「けしからんやつだ」という話になる。しかし実際は、同じ政治共同体の中でも当然利害の対立はあつて、そこでどう交渉して調整をはかつていくのが重要であるということにはあまりに無頓着なところがあります。

西川 アメリカには「オルタナ右翼 (Alt Right)」と呼ばれるような新たに注目されはじめた保守勢力がいます。似たような考え方をしています。彼らは、一枚岩のアメリカ的なアイデンティティーが存在するという前提に立

が、「アメリカを再び偉大に」というスローガンにも表れているように、語りかけている相手としては明らかにそうした人々を意識しています。しばしばそうした人々のことを「忘れられた人々」などと呼んでいます。ニューヨーク・タイムズ、ワシントンポスト、CNNなどの主流派のメディアは一般大衆から乖離したエリート向けのものであつて、トランプを支持する人々に不利益になるような情報ばかりを選択的に流しているという主張などは典型的だと思います。共和党も民主党も支配階層を構成する人々は既得権益で繋がっていて、ある意味共犯関係であると。ああいう人々がいるからこそ政治が劣化していくのであつて、自分はそのような支配階層の構成者ではないという主張も欧州のポピュリストと共通すると思います。彼は、民衆の意思が政治的な決定の基盤であると必ずしも明言しているわけではないですが、彼を支持している人々にはそういう考え方が非常に強いですね。

古賀 既存政党や既存のエリートたちが共犯関係であるという主張は、欧州のポピュリスト勢力も共通していますね。欧州は国政選挙で比例代表制が採用されている国が多いので、新しく政党をつくって出てこられるという条件があります。そうすると、既存の政党は右も左も一緒にまとめて、「あいつらは全員エリートだ」という図式を示しやすいく。

つています。アイデンティティーと言っても実は二種類あつて、一つは民主党的なアイデンティティーで、いわゆるポリティカルコレクトネス的な、人種やLGBTQ (性的なマイノリティー) の権利を尊重する立場です。多様なアイデンティティーの並立・共存を積極的に認める立場です。それに対してオルタナ右翼が考えるもう一つの立場は、アメリカ的な一枚岩の大きなアイデンティティーがあつて、そこに同一化できる人間だけが自分たちの仲間だと考えるものです。「ムスリムの監視を強化しろ」とか「移民を追い出せ」といった主張の背景には、そうした人々はオルタナ右翼が言うところのアイデンティティーに同一化できない、仲間にはなれないという認識があるわけです。

古賀 欧州も似た図式ですね。どの国の右翼のポピュリストも「フランスを優先せよ」「オーストリアを優先せよ」と主張しています。この場合のフランスやオーストリアは単に法律上国籍を持っているだけでなくて、彼らが考えるところのフランス的なるもの、オーストリア的なるものと同化できるかどうか重要な要素になってくる。

西川 人種とか言語とか。

古賀 人種という言葉を出してしまうと、ヨーロッパではアウトになります。

西川 アメリカでもアウトですね。だから人種とは言わず、アイデンティティーと言っているのだと思います。

古賀 欧州の場合は、敵の描き方が時代ごとに変わってきていますが、近年はそれがムスリムになっていきます。ムスリムの人たちは、個人の自由のような普遍的な人権という、欧州の人たちが築き上げてきた普遍的な価値観を受け入れてくれないから同化できない、だから彼らはダメだという議論の組み立て方をしています。

トランプは公約を実行していくのか？

古賀 実際のところトランプは、支持者たちの政治的な要求をかなえる政策を具体的に進めていくのでしょうか。

西川 メキシコとの国境に壁をつくることやイスラム教徒に対して監視を強化するなど、何らかの形でそうした人々の自由を制限するといったことが本当にできるのかどうか。特定の宗教を信仰する人々に対してそのような制限を課すことは明らかに信教の自由に抵触しますから、憲法違反でもあります。トランプはそうした限界を自覚しつつ、ある程度「ガス抜き」をしながら巧みにごまかしていくのかもしれない。しかし、彼は本当に過激な政策を実行に移すかもしれない。

日本では楽観的な見方でものを言っている人が少なくない印象があります。トランプの発言は選挙で票を獲得するため

ているわけです。

もともと、連立政権における成果が支持拡大につながるかは、連立相手との関係に大きく依存します。例えば右翼ポピュリスト政党である自由党が政権に参加した際のオーストリアでは、連立を組んだ国民党という主要の保守政党が、自由党のかつて掲げていた財政再建や公的セクターの民営化などの政策を自分たちのものに換骨奪胎しました。

その結果、連立政権の下で改革が実現すると、これまで自由党に改革を期待していた支持層が国民党に回帰するという現象が見られました。国民党からすれば、これまで自分たちの支持基盤が侵食されていたという意識があったわけです。それをむしろ右翼ポピュリスト政党の政策の中で実現可能で、かつ、票になりそうなところを採用するという選択をしました。

西川 主要な保守政党がポピュリスト政党の主張を毒の少ない形で実現していく形ですね。

古賀 アメリカの場合は、大統領も議会も共和党が勝っていますから、大きなことができる環境ではありませんね。

西川 それはおっしゃるとおりなのですが、アメリカの共和党も決して一枚岩の存在ではありません。トランプを支持しようとする層もいれば、宗教右翼、いわゆるエスタブリッシュメントと言われるこれまでの共和党の主流派などが併存している状態です。共和党内部を細かく見ていくと

のパフォーマンスにすぎないから、当選したら案外普通の政治家になるのではないかと思っている人もいます。しかし、それは希望的観測に過ぎないでしょう。彼は自分への支持をつなぎとめるためにも、自らに投票してくれた民衆の意思が政治的決定の基盤であると思っている支持層が要求してやまない過激な政策を実行していくかもしれない。

古賀 欧州では多くの国が連立政権なので、右翼ポピュリスト政党が選挙である程度票をとって、連立や閣外協力のような形で政権に入ったケースがいくつもあります。これらの党の主張した政策のすべてを実行できなくとも、部分的には連立相手が右翼ポピュリスト政党に花を持たせることがあって、入国管理が厳格化したことがありました。

配分をめぐる主張は財源の問題がありますからなかなか実現しないことが多い。ポピュリストは大盤振る舞いを選挙で約束したりしがちです。「減税しながら社会保障を増やせ」と言って支持を集めたケースもありますが、そのすべてを実現することは当然できません。そこで、一部の政党は、自分たちの支持層に近い特定の階層に限定して給付を行うといった政策を実現しようとしています。例えば、デンマーク国民党は、年金受給者から多く支持を集めているため、年金問題に関してだけは何とか自分たちの主張を通そうとしているそうです。このように、欧州の右翼ポピュリスト政党は連立政権に入ることでも何がしかの形で成果を得

諸勢力の連合になっていて、その中でどういう綱引きが行われるかで今後の共和党の性格がある程度決まっていくのだと思います。トランプがエスタブリッシュメントの歓心を買おうとすれば、彼の掲げる政策は中道寄りに修正されていくでしょうが、自らを熱烈に支持してきたコアな支持層を繋ぎ止めることを優先するのであれば、簡単に中道よりは軌道修正していきません。

2017年は、オランダ、フランス、ドイツなど欧州各地で選挙が行われます。仮にポピュリスト政党が政権において支配権を握ることになれば、予想される最悪のシナリオとしてどのようなことが考えられるでしょうか？

古賀 まずは入国管理の厳格化をはじめ、移民政策の見直しだと思います。もちろん、一部の右翼ポピュリスト政党が主張するような、今いる人々を追いつくことは、現実的には難しいでしょう。ただし、過去の例を見ると、移民的な出自を持っているが国籍を持っている人々に対しては、追いつくことはできないにしても露骨な嫌がらせをすることがありました。地方自治体レベルの話ですが、オーストリアでは、自由党の党首だったイェルク・ハイダーという人物が州知事を務めていた時に、その州の公式な標識の二言語表記をやめてドイツ語に一言語化しようとしたことがありました。あるいはフランスで国民戦線が首長をとった自治体では、公営住宅への入居に際して移民系の人

たちを後回しにするなどの嫌がらせが行われたそうです。

西川 なんだかケチくさい話ですね(笑)。

古賀 そんなことしかできないからなんですけどね。とはいえ、そういう嫌がらせもジワジワやっていると、社会の中でいろいろな形で影響が現れてきます。フランスでは——これはル・ペンというよりも主流派の政策ですが——移民系の出自を持った若い人たちに対する警察の職務質問を強化しました。こういうことをやっていると、その人たちの不満が溜まっていきます。「警察は俺たちの顔を見るとしょっちゅう捕まえる」という不満がいつかどこかで爆発すると、2005年にパリ郊外で起きた暴動のように噴出することがある。因果関係を無理やりこじつけることには注意が必要ですが、原因の一つになっていた可能性はあります。

ル・ペンは暴動が起きた時には若者たちを頭ごなしに非難するのではなく、「今の政府が悪いからだ」という言い方をしました。移民系の出自を持った人たちによる暴動やテロが起こると、そのことが選挙上、誰に有利に働くのかと言えば右翼ポピュリスト政党です。ですから気の長い話ではありますが、移民や移民系の出自を持った人を締め付けることで彼らの不満が噴き出すことを暗に期待しているところがあるのかもしれない。

西川 トランプも同じようなことを言っていました。不

種偏見が強くなる。そうすると、テロや暴力に怯える人々が増えます。トランプのほうに走っていくことになるかもしれない。オーストリアやフランスのポピュリストは、戦略的にそれを狙っているんですか。

古賀 もともとは戦略的に考えていたものではなく、自分たちの主張なり政策がそういう結果につながりやすいことに気が付いたのではないかと思います。けれども、戦略的にやっていると周囲から見られることを一番恐れていた面もあります。危機を自分たちでつくり出す、いわばマッチポンプだと見なされては信頼が急落します。ただその一方で、「それを見たことか！」という機会を待っている。全面的に戦略的にやっているとは言えませんが、自分たちに有利になることは薄々わかっているのだと思います。

例えば、2011年にノルウェーでブレイヴィークという人物による銃乱射事件が起きました。彼は進歩党というノルウェーの右翼ポピュリスト政党に所属していました。あの時進歩党が、「ブレイヴィークの主張は我々の思想ではない。我々はああいっただ暴力に与するものではない」と一生懸命主張したのは、自分たちの思想が直接的な暴力の契機になってしまえば、支持者が離れていくことを理解していたためでしょう。ですから、そこはかなり慎重にやっているといます。けれども、イスラムフォビアや移民に対する嫌悪の感情が高まることは、彼らにとって有

審人物に対する警察による職務質問 (Stop-and-Frisk) ・所持品検査の強化などです。社会の不自由化をつくり出していくことで、自分たちが有利になるような危機を実際に自分たちの外側に生み出し、それを自分たちの推進力に変えていこうという発想ですね。

古賀 そうです。危機を直接つくっているのではないにしても、結果的に危機が起きることでそれに対応できないエリートを批判するという図式をつくり上げるわけです。西川 右翼政党からすれば、「我々のほうがより適切な対応ができる」という認識を徐々に国民に広めていくことができる。

古賀 小さなことではありますが、日頃、右翼ポピュリストたちが吹聴していることが実際に勃発してしまうことが一番まずいシナリオとして考えられることです。

排外主義の源

西川 さきほども言いましたが、トランプもイスラム教徒に対する監視強化や職務質問・所持品検査の強化などを訴えてきました。そのことで、ますます標的にされる人々の不満が高まっていて、どこかでテロや銃乱射事件が起きたりすると、ますますイスラムフォビア(恐怖症)や人

利に働くことはよくわかっているはずですが。

西川 やはり、欧州のポピュリスト政党が支持を集めている背景の中核には、移民に対する排斥感情やイスラム教徒に対する忌避感があるのでしょうか。

古賀 それと車の両輪になっているのが、反EU問題です。シリアの難民危機の時にはこの二つがきれいに噛み合ったわけです。難民の問題はEUの管轄ですが、例えばドイツのメルケル首相がかつて主張したような、EU全体として難民を受け入れて各国に人口比で割り当てるようなことがもしも実施されるとすれば、「難民の受け入れは嫌だ」しかも「EUが上から決めるのも嫌だ」という人にしてみれば、嫌なEUが、自分たちが一番嫌いな難民を押しつけてくることになる。

西川 まさにEUは嫌なやつの特徴になるわけですね。そもそもなぜムスリムに対して嫌悪感を持つのだと思いますか。

古賀 100人いれば100通りの経路があるとは思いますが、まずは異質なものに対する情緒的な嫌悪感があると思います。それから経済的な要因も無視できないと思います。というのは、欧州各国の経済が厳しい状況にある中で、ムスリム系の移民第二・第三世代の若い人たちの中には、教育水準や文化的な適応の問題などによりなかなか就職ができず、経済的な支援が必要とされている人たちが少

なくないのが実情のようです。この際に、一部の人たちからは、本来なら自分たちに割り振られたはずの政府の資源がムスリムに割かれるという不満が示されるわけです。

EUの危機の時は、ギリシャに対する支援が批判の対象になっていました。ギリシャ人に対して、エスニクな嫌悪感はそのなにか強くないと思いますが、財政支援をすることになると反発することになります。右翼ポピュリストからすれば、「そんな金があるんだったら我々の生活をよくしてくれ」「税金を上げ、社会保障を削ったばかりじゃなかいか。金がないから削ると言いながら、その口でギリシャに金を回すのか」といった主張を展開するわけです。ですから、イスラム教徒に対しても、心情的な人種・宗派的な対立とともに経済的な要因が絡んでくると一気に嫌悪の対象になりがちです。

グローバリゼーションの負の側面

西川 日本の大学で教えていると、グローバリゼーション⇨アメリカナイゼーションと単純化して考えている人が多いんです。そういう人の中にはTPPについても、「アメリカの謀略だ」なんて言う人がいたりします。トランプは真つ先にTPPからの離脱を宣言しましたから、陰謀論

などあり得ないことがよくわかったと思います。トランプの支持層には、自分たちこそグローバリゼーションの真の敗者だと思っている人が山のようにいます。そうした人々は、むしろ自由貿易は自分たちから富を奪う悪しきシステムだと見なしている。

古賀 欧州でもグローバリゼーションの敗者がポピュリスト政党の支え手になっているという指摘は数多くあります。この点も、右翼ポピュリスト政党が反EUの姿勢となっている要因の一つでしょう。欧州において、EUというのはある意味グローバリゼーションの象徴となつています。「グローバル社会で生き残るために我々の生活を守る」というのがEUの謳い文句だったはずが、気が付いたらグローバル化を押し進める主体になっていたわけです。

西川 このところ反グローバリゼーションが世界を覆っていると言われますが、欧州とアメリカではその質が少し違いますね。欧州での反グローバリゼーションは、Brexit（英国のEU離脱）を推進したイギリス独立党党首のナイジェル・ファラージに代表されるように、自由貿易への反発よりも反EUというスタンスですね。アメリカの場合は、反グローバリゼーションとは反NAFTAであり、反TPPです。つまり、反自由貿易を意味している。

古賀 EUも自由貿易協定ではありませんが、もう一歩踏み込んだシステムですね。

西川 人の移動も自由だし、通貨も統合した。

古賀 欧州域内は小さなグローバル化になっていきますから、より批判が高まりやすい存在かもしれないですね。

西川 EUの存在をどのように考えていくのかという問題が今欧州で起きている複合的な危機の最大の要因になっていますね。Brexitは間違いなくそうだし、昨年12月にはイタリアで憲法改正を問う国民投票が否決され、オーストリアではポピュリスト政党の候補者があわや大統領になるところでした。フランスでも国民戦線が伸びている。

古賀 ドイツのように少なくとも現状ではEUの経済統合によって大きな利益を得ている国と、フランスやイタリアのように競争の激化に伴い一層の改革が求められている国とではEUに対する考え方は異なるのだと思います。けれども、どの国でも「我が国の富は我が国の国民に」と思っている人たちが反EUの有力な担い手になっていきます。そうした人々の支持を求めて、右翼ポピュリスト政党は「今の政治エリートはEUの言いなりである」という批判をして、支持を集めやすい状況にあります。

具体的な例として、昨年の12月に、国民投票により憲法改正が否決されたイタリアが挙げられます。否決支持を訴えた政党にはポピュリスティックな政党が多く、いずれも、彼らのいうところの、「EUの言いなりである既存の政治エリート」に対して否定的です。イタリアでは、90年代後半

には、ユーロに参加するために財政改革を実現した実績があるのですが、現状では、EUを改革の梃子に用いるのは効果的ではなくなっているようです。その背景には、統合によって経済的な利得が見込めない層が多くて、彼らの不満が高まっていることがある。

西川 これはEUに反発する一種のナショナリズムの高まりと整理できそうですかね。

古賀 分配をめぐるナショナリズムだと思います。イタリアでは、かつて右派プロックの内部で、北部と南部の経済格差を背景に、北部の先進地域で創出された富を北部のみ配分すべきと主張する北部同盟という右翼ポピュリスト政党と、南部に基盤を置く国民同盟という政党の緊張関係がありました。しかし両者は、国籍なき資本の流動化に反対する反グローバリズムに立脚することで折り合いがつけられた。さらには新しくイタリアに入ってきて、そのイタリアの富の分け前を受けようという人々を排除しようという段階になると、団結して行動できたのです。こうしたことから、やはり反グローバル主義が、今ヨーロッパで起こっている右翼ポピュリスト政党の伸長やEUへの反発の拡大などの一連の動きの根底にあると考えていいと思います。

西川 分配をめぐる自分たちに害を与えろと思われろものに対する拒否感情が反グローバリズム、反エリートと

して表出しているわけですね。

古賀 一方で、そうしたグローバルな動きを利用して今の国内政治の仕組みを変えようと考えた人たちもいます。ポピュリストが掲げている主張の中には、「今の政治システムが機能していないから、それを変えよう」という主張があります。必ずしもグローバル化の敗者だけがポピュリストを支えているわけではありません。ただし、経済的に不利な人たちの支持なしにはここまで規模にはならないことは間違いなく言えると思います。

ポピュリズムは政治を変えるか？

西川 そういふ民衆による意思の表出が実際に政治を変える可能性はあるのでしょうか。

古賀 現時点ではポピュリストの側は言い放しになっています。できること、できないことの峻別もなしに、受けの良さそうな主張ばかりを列挙しているところがある。これは決してよい変革には向かわないと思います。

他方で、右翼ポピュリスト政党を支持する人々の不満は、必ずしも根拠のないものではないように思われます。経済の面では、EUの統合はなし崩し的に進んで、気がついたら域内での大きな格差を抱えたままになってしまっ

ている。ここには是正すべきものがあることは間違いありません。政治エリート側もそのことを重々承知していますが、コストや政治的エネルギーの問題もあってなかなか手をつけられないで来た。そこで、ポピュリストがお尻に火をつける形で、うまくいっていない現状のシステムに対する変革をせつづく役割にはなるのかもしれない。

西川 アメリカも同様です。サンダース現象やトランプ現象が起きたことは、現状の政治システムや社会に深刻な分断、亀裂、機能不全が存在していることが背景にあると見ることが出来る。これらの問題をそのまま放置しておく、アメリカという国家が完全に行き詰まってしまうかもしれないという深刻な危機感の表れでもある。そうした危機感が出されることによって、アメリカの政治や社会のあり方を抜本的に改革する契機になる可能性もあります。だから、「ポピュリズム」も「ものすごく悪いもの」というわけでもなくて、一種の創造的破壊と見ることもできるかもしれません。

ただし、やはり問題なのはトランプ現象の中に排外主義的で差別的な言動が多く観察されることです。トランプの主張は自由民主主義を否定する、不自由を是とする考え方です。特定の誰かを自分たちに害を与える者たちと見なし、そうした人たちの自由をある程度抑制すれば自分たちはより幸せになるはずだという考え方が果たして正し

いのかどうか。

古賀 今のポピュリストたちが持っている排他性や差別的なところ、つまり毒の部分はどう飼ひ馴らしていくべきか。今、欧州ではその模索が始まっています。地道な話ですが、ポピュリストたちの主張の実現可能性や数字のおかしさを一から丁寧に指摘していくことを粘り強くやる、というのがその例です。大言壮語や根拠のない話に対しては、その都度きちんとした説明で否定していくわけです。

例えばフランスでは、移民が来るから年金財政が悪化しているという主張に対しては、政党指導者や知識人たちが数字を示しながら、むしろ移民のおかげで年金財政が潤っていることを説明しています。多分に対処療法的ではありませんが、彼らの主張の間違いをその都度指摘して正していくことを欧州の人たちは今かなり一生懸命やっています。

西川 ご指摘のように、根拠に基づく客観的事実ではなく扇情的な主張ばかりが先走っていくという、いわゆる「ポスト真実 (Post-Truth)」というのは、まさにアメリカにもあてはまる傾向だと思っています。それが今回の大統領選挙が我々に突きつけた深刻な課題なのではないかと思うんです。

古賀 経済がグローバル化して国境の垣根が低くなって、生活レベルでも国境を越えて人々がある種の運命共同体に近づいて行っていますが、政治は未だに国民国家レベ

ルでやっています。国民国家レベルで実施される選挙において単純に票を獲得することを最大の目標に置けば、「我々国民の資源は、国民に配る」という形で、有権者たちの利益を最大化することが合理的と言えるでしょう。

西川 それは「民主主義の民主化」とも言える動きですね。自由民主主義は「民主主義」のほうに力点を置けば置くほど、こうした動きが加速していくことは避けられないのかもしれない。

古賀 こうしたことを一国内でやっているのが、ベルギーという国です。この国ではオランダ語圏とフランス語圏が対立しているのですが、オランダ語圏とフランス語圏では別々に選挙をやります。その結果、オランダ語圏の政党はその有権者にとって有利なることを掲げます。フランス語圏にも同じことが言えます。ですから選挙で票を獲ろうと思えば、国全体の利益よりも自分たちの地域の利益を優先に考えるのが、残念ながら当然の帰結であるのが現状です。

西川 それは競合するその他のマイノリティーの利益を犠牲にしようという発想でもありません。要するに、自らと競合するより数の少ない他者の自由をある程度制限すれば、自分たちの利益が上がるはずだという考え方です。それはマイノリティーをスケープゴートにすることにもつながりかねませんが……。

古賀 単純に得票を最大化することを是とするシステム

では、その部分は避けられなくなってしまう。是正するためには、選挙で集めた票の結果を政策に反映するという部分以外での調整が必要になってくるのかもしれない。

西川 こうした傾向がみられることをもって、「ファシズム化の兆候だ」と言う論者すら出てきていますが、古賀先生はその辺はどうお考えになっていますか。

古賀 ファシズムという言葉はある程度限定的に使う必要があるのかなと思います……。

西川 おっしゃるとおりです。私もちょっと懐疑的なんですね。

古賀 ファシズムは、人々を組織化しようとしたという特徴があります。右翼ポピュリスト政党は、そういう意味では組織化の部分が弱いように思われる。比較する時にはそこに注意が必要であるかと思えます。

西川 自由そのものを制限しようしているが、政治への参加自体は促進しようとしているわけですね。自由と参加というベクトルで考えると、自由を制限したが、特定の人々の参加を促進しようとしているわけだから、やはりファシズム化とは違うのではないかなという気がします。

古賀 かつてのファシズムは、動員を強化して、政治の中に人々を巻き込もうとしていました。右翼ポピュリスト政党にも、その点では似た側面はあるかもしれません。ただし、今の欧州のポピュリスト政党は一生懸命基盤を高め

が欧州を席巻したと見るのはいかがでしょうか。

古賀 その側面はかなり強いと思います。EUのヨーロッパ大での統合に対する「ノー」が、イギリスをはじめ他の国でも高まっていることは間違いない。もちろんナショナリズムがどの程度我々の考える伝統的なネーションへの帰属意識、あるいはネーションこそがアイデンティティーの根本であるという排他的なアイデンティティーの主張を伴っているのかはわかりません。ただネーションが持っている一つの機能である社会的紐帯や国内での分配機能が弱まっていて、そこに対する揺り戻しの側面はあるのかなという印象があります。

今年はいTunesやフランスでも選挙があります。ドイツでは、ナチスを生み出した反省から伝統的に排外主義や人種差別に関する強い危機感があり、排外政党は出てこれなかったと考えられました。しかし、「ドイツのための選択肢」というポピュリスト政党が出現して、状況が変化しています。この党は、もともとは「ユーロをなくそう」という経済的な主張から出てきた政党でしたが、今では移民排斥を訴えるなど、排外主義に振れてきています。ただし、ユーロをなくして経済的な富を自分たちの手に取り戻そうという主張を出発点にしているところから見ると、経済的な要素は、ヨーロッパのいろいろな現象の中に強く影響を及ぼしている。

て政党組織をつくらうとはしていますが、ファシズムほどには成功しているとは言えないでしょう。選挙の面でも、組織的に動員するよりも点在している個人に直接アピールする側面のほうがまだ強いかなと思います。もちろんファシズムだって全て組織化できたわけではないでしょうが、動員のやり方には違いがあります。それから、イタリアのファシストもドイツのナチスも最初は選挙に進出して、議会で議席を得ようとしたのですが、政権を獲得した後は議会政治を否定しました。今の右翼ポピュリスト政党は議会を否定するところにはまず行かないと思われれます。

西川 アメリカもそうですね。トランプも別に憲法や議会制を否定しているわけではない。

古賀 その部分は多少楽観できるかもしれませんが。議会に来て文句を言ってくれる限り、どういう文句があるかわかることになる。その意味では議会に呼んできてしっかりと話を聞くことができる分だけまともなやりとりができるのではないかと期待はあります。

EUのゆくえ

西川 いま欧州で起きていることは、先ほどの言葉で言えば、やはり分配をめぐるナショナリズムと呼ばれる現象

従来は、ヨーロッパは階層社会あるいは柱状に分かれたサブカルチャーに分断された社会であると言われながらも、社会が分かれている中でも一定の富の分配もありましたし、その中で文化的なまとまりもあったのだと思うんです。けれども、それがさらに小さく分節化されていって、その中で自分たちが不利な立場に冷遇されているという自己意識が高まっていったところに今回の現象の根源があるのかなと思います。

それをどのように克服するかはとても難しい問題です。Brexitを支持した人たちの中には単純に「ポーランドから移民が来るのは嫌だ」と言った人たちもいますが、他方で今のEUは「緊縮財政だからけしからん」と言っていた人たちもいます。彼らは財政を絞らずに、分配をしつかりやるべきだと考えるわけです。EUで社会政策をやることにずっと反対していたのはイギリスですから、イギリスの人たちがそれを言うのもおかしいのかもしれない。私は専門家ではないので、EUレベルで社会政策をどの程度できるのかはよくわかりませんが、今後はそうしたことが大きな課題になってくると思います。

西川 EUは社会政策をある意味で改善できれば、問題は相対解決されると。

古賀 少なくともEUは、自分たちの富を奪っていくという議論は相対的に弱まるのかもしれない。ただし、た

とえヨーロッパでそれができたとして、世界大でそういうことができるのかとなると、それは今日、明日にできる話ではないでしょう。

西川 では、トランプが新しい政治の形を提案できるかと問われると、これまでの政治のあり方や既存のシステムに対する否定、アンチテーゼであるとは思いますが。ただし、それが新しい何かが生み出される前の創造的な破壊であるのかどうかは疑わしいかもしれません。既存のシステムに対する単なる破壊ではないかという懸念もある。

アイデンティティーVSアイデンティティー

古賀 今回敗れた民主党の側では、今までの民主党のあり方を再定義しようという動きは見られるのでしょうか。

西川 そういう動きはすでに出ていまして、いま民主党の全国委員長を決める選挙をやるところです。有力視されているのがキース・エリソンという人物で、彼は連邦下院議員ですが黒人でイスラム教徒でもある人物です。そういう人を政党の顔とも言わなければならない。そういう人です。それは、どちらかと言えば民主党をアイデンティティーの多様性を認める方向にシフトさせていこうという方針の表れなのだと思います。

代表され、それに対する強烈的なアンチテーゼとして今後民主党がさらにリベラルな姿を打ち出してくるかもしれないわけですね。

西川 そうなんです。今後はアイデンティティーとアイデンティティーの対立が二大政党の主要な対立軸になるかもしれないと見えています。逆に言えば、希望的観測に過ぎるかもしれませんが、政策面ではひよっとすると超党派的な協力が部分的には実現可能になっていくかもしれない。

古賀 アイデンティティーとはあまり関係のない経済などの政策面では妥協が可能であると。

西川 ええ。アメリカの政党政治は二極分化していると言われてます。民主党はよりリベラルに、共和党はより保守的になり、中道勢力が後退・消失してイデオロギー的に分極化した状態であると。今後は二極分化の状態が続くにせよ、その形態が変わっていくかとしているのかもしれないですね。

古賀 そうした社会において、アメリカをうまく統治するために大統領に求められる資質はどういったものになるのでしょうか。

西川 難しい質問ですね(笑)。仮に今後二大政党がアイデンティティーの軸で対立し続けていくのであるとすると、統治者としての大統領もアイデンティティーを体現した存在になっていくかもしれません。たとえば、一方の極

人種的マイノリティー、LGBTQ、移民、イスラム教徒などの人々の存在を認め、それらの人々のアイデンティティーの多様性を踏まえた上で、多様な人々の間で共存共栄をはかっていこうという考え方ですね。トランプのコアな支持層とは180度違うスタンスです。

古賀 とすると、いわば全面対決を選択すると。

西川 そうだろうと思います。20世紀中葉ぐらいから共和党と民主党の二大政党の対立軸は、保守とリベラルによるイデオロギー対立でした。トランプが大統領になって、それに対抗する民主党がどのように舵を切っていくのかはまだはつきりとはわかりませんが、今後はひよっとすると二大政党は保守とリベラルというイデオロギーの軸では明確に区分することができなくなっていくかもしれません。どちらかと言えば、イデオロギー的な差異はごちゃ混ぜになっていって、二大政党を分かち軸は今後はアイデンティティーになっていくのではないかと。そんな気がします。

古賀 ヨーロッパの場合は、アメリカの保守に相当する勢力が相対的に弱いのだと思います。アメリカに比べれば政府は大きいですし、社会倫理的にも人口妊娠中絶や同性婚などは、国全体がリベラルに寄っています。だからこそ「我々こそがサイレントマジョリティーである」と主張する右翼ポピュリスト政党が出てきたとも言えます。

アメリカの場合は、社会的な保守がトランプ的なものに

にはまさにトランプのようなリーダーが存在するのではないのでしょうか。白人でキリスト教徒で男性中心主義であるとかですね。そうした同じようなアイデンティティーの背景を持ったアメリカ人に訴えかけ、それらの人々を強固に結びつけるような資質とどう言えるか、象徴とどう言えるか。他方で、民主党の側はもっと多様なアイデンティティーを持つ人々に訴えかけるようなリーダーがトップになっていくのではないのでしょうか。いまは黒人のオバマ大統領が民主党を率いていますが、今後はイスラム教徒とか、あるいはひよっとするとLGBTQの民主党リーダーが出てくるかもしれない。二大政党の指導者は、それぞれの政党支持基盤の中核的アイデンティティーを象徴するような存在になっていくのではないかなと思います。

古賀 その両者を束ねる存在を大統領に期待することはちょっと難しくなってくるかもしれませんね。

西川 おっしゃるとおりで、それは非常に難しいんじゃないのでしょうか。オバマ大統領が2008年に当選したとき、彼はアメリカの二極分化を克服すると言っていました。結局それは実現できなくて、むしろ余計にアメリカの分断が深刻な状態になってしまった感すらある。今後、もしアイデンティティーの対立が政党の主要な対立軸になっていくとすれば、両者を架橋することは今まで以上に困難になっていくとは考えられないのでしょうか。(終)